

学会ニュース

目次

・ 第31回大会および第32回大会について	1
・ 代表幹事を終えて——終わりなき18世紀——		
	小田部 胤久 2
・ ラモーと辛子酢	小穴 晶子 4
・ 就任挨拶	増田 真 6
・ 事務局より	 7

第31回大会および第32回大会について

本年度の大会は、2009年6月20日（土）、21日（日）に、多摩美術大学の八王子キャンパス（東京都八王子市^{やりみず}鎌水）で開かれました。開催校責任者は、小穴晶子会員でした。6名の会員が自由論題で発表され、共通論題『帝国』（コーディネーターは長尾伸一会員）では4名の方がご報告くださいました。今回は、国際交流の一環として、韓国18世紀学会会長の鄭珉（Jung Min）氏お招きし、総会の席上、ご挨拶をいただきました。（共通論題の発表者の一人として中国から清朝関係研究者の牛貫傑氏をお招きいたしましたが、事情によりおいでいただけませんでした。）また、「18世紀フランスバロックの巨匠J.Ph.ラモーをめぐって」と題されたコンサートも催され、大変多彩な内容で盛会のうちに終わりました。

来年度の第32回大会は、2010年6月26日（土）、27日（日）に新潟大学で開かれる予定です。開催校責任者は逸見龍生会員です。詳細は、次号の学会ニュースでお伝えいたします。

代表幹事を終えて——終わりなき 18 世紀——

小田部 胤久（東京大学）

6年前に安藤隆穂代表幹事（当時）から事務局を受け継ぎ、最初の2年間は佐々木健一代表幹事のもとで事務を担当し、その後4年間は代表幹事の座を汚してきた。この6年の間に合計1年2ヶ月ほど日本を留守にしていたため、もしもこの間それほどの大過なく学会が日常的に運営されてきたとするならば、それはとりわけ常任幹事の方々のお蔭である。6年間年報編集委員長を務められた安西信一幹事、また4年間総務を担当された馬場朗幹事のご尽力なくして、学会活動は成り立たなかったであろう。また、笠原賢介幹事には会計を、井田尚幹事、岩佐愛幹事には年報書評欄、小穴晶子幹事には年報業績アンケート欄をそれぞれ2年間担当していただいた。年に1度の大会は本学会の中心的活動であるが、この4年間大会開催を引き受けてくださった青木孝夫幹事（広島大学）、平山敬二会員（東京工芸大学）、松田聡会員（大分大学）、小穴晶子幹事（多摩美術大学）にも改めて御礼申し上げたい。

この数年の大学あるいは学問をめぐる状況は大きく変化しつつあるが、そのなかにあって、日本18世紀学会の精神はますます重要性を獲得しているように思われる。こうした点についての私感を綴ることで退任の挨拶としたい。

昨年10月よりドイツに滞在し、当地での大学制度の急激な変化を目の当たりにしているが、教育制度の面では、ヨーロッパ統一水準の学士・修士・博士制度（ドイツ人も、従来の Magister, Doktor と区別するために、bachelor, master, doctor と英語読みする）の導入が大きな影響を及ぼしている。3年で学士号を取得できるが、そのために学生は数多くの credit point を集めなくてはならない。講義やゼミへの出席で1点、ゼミでの発表でハンドアウトを配ってさらに1点、発表がうまくいって1点、さらに学期が終わってからレポートを出して1点、といった滑稽なまでの点数主義である。研究制度もいわゆるプロジェクト型へと移行しつつあり、ここでは Profil と Evaluation がものをいい、プロジェクトが何件採用されたかが大学評価にとっての点数となる。国際協力は Evaluation の際の目玉でもあるので、企画書ではわれわれ外国人の名前もいつの間にか研究協力者として挙がっていることがある。さらには、外国から何人の客員研究員が来たか、といったことも重要らしい。大学間の競争にさらに拍車をかけているのが、私学の設立である。たとえばブレーメンの Jacobs University（ちなみに、つい先日この大学を訪れる機会を得たが、20世紀初めに作られた煉瓦造りの兵舎を（平和？）利用した郊外のキャンパスは、都市のなかに散在する（伝統的な）ドイツの大学とは違い、英米のそれを思い出させる）。学部生は年間240万円ほどの授業料を負担しなくてはならないが（長年学費ゼロのドイツでも学費徴収が数年前から始まったとはいえ、年間の学費は13万円程度である）、それに見合った学生へのサービスは充実している（なお、この大学での授業はすべて英語で行われる）。そもそもこうした改革はグローバル化に対応するものであるから、日本の昨今の状況とも対応するところが大きく、それは私たちの見慣れた日常の一部となりつつある。

もちろん、昔はよかった、などといいたいのではない。旧来のドイツの制度に多くの弊害があったことは事実である。かつての制度は学生に対してあまりに放任主義的であったし、教授資格取得までに長い年限がかかりすぎる点も問題であった。また、新制度の導入によって日本の制度

との整合性が増したため、日本からの留学生にとって利点は大きい。さらに、こうしたプロジェクトのお蔭で私自身もいくつかの会議に参加させてもらったが、こうしたことはかつてならばほとんど考えられないことである。だが、グローバル化の波がかくも容易にドイツの「フンボルト的」と形容される伝統を浸食していることに驚きの念を持つのも事実である。新たな制度に欠けているもの、それは研究が日々の楽しみとして行われる、というごく静かな、ありふれた、そして連綿と続いてきた風景であるように思われる。

私が思い出すのは7月16日から17日にかけてミュンヘン科学院で開かれたワークショップ「自然と芸術——シラーとシェリングの間の美学の構想」である。これは、シラーおよびシェリングが1793年から1807年の間に書いた美学上のテキストを中心に、フェルノの風景画論、ヘルダーリンの「帰郷」、さらにはラインハルトの絵画作品をも視野に入れた一種の読書会である。参加者はあらかじめ送られてきたリストに基づいてテキストを予習し、当日はイントロダクションとしての発表に続いて自由に討議を繰り広げる。私が出る幕などもととなかったが、この2日間、私は学生に戻ったかのようにテキストを読む快樂を堪能した。このワークショップは、その主催者によれば、2年後のより大きな会議のための準備として開かれたものであるという。そうであるから、このワークショップも各種財団に補助金を申請するために企画書を書く準備を兼ねていたのかもしれない。だが、2年後の会議のために人が集い、このような充実した時を過ごす、ということ自体一つの驚きである。よく顔を合わせる研究者が特定のテキストについて議論することを楽しみに各地からやってきて、互いに談論を繰り広げる姿は、日本18世紀学会の先輩諸兄姉が培われた〈サロンの精神〉——そして、この精神はまさに18世紀にふさわしい——を私に思い起こさせるものであった。

私が会員になったのは博士課程に入りたてのころである。私はとりわけ、年報末尾の業績アンケート欄を眺めるのが好きだった。業績表というと、昨今の点検評価において最も重視される点の一つであるが、年報の末尾のそれはこうしたけちくさい評価とは無縁である。こんなことを研究している人がいるのか、という驚きが未知の領域へのあこがれを生み、研究者同士の新たな出会いをもたらす。異なる研究分野に従事する専門家が相互に対等に（いわば素人的に）対話をし、それを自らの専門へと折り返していく営み、これこそ、私たちが今なお多かれ少なかれそのなかに生きている〈近代〉の台頭期としての「18世紀」を学際的にさまざまな仕方で主題とする本学会において、最も重要な事柄の一つであろう。

事務局を預かってこの6年間、私が心がけたのはこの18世紀的〈サロンの精神〉を継承することであった。電子化の流れを受けて、会員諸氏から事務局に送られてきた学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々に伝達するサービスをはじめたのも、その一環としてである。

もちろんこの〈サロンの精神〉はうちに閉ざされたものであってはならない。特筆すべきは韓国18世紀学会との交流であろう。この点では、とりわけ高橋博巳幹事、長尾伸一幹事に負うところが多い。06年の広島大会では、金定姫・韓国18世紀学会会長（当時）の英語による特別講演があり、また、共通論題「礼（儀礼・礼儀・作法）を通して見る文明観」では関周植氏（韓国嶺南大学校）が韓国の「礼楽思想」をめぐって日本語で報告された。昨年の大分大学において宣承慧氏（韓国国立中央博物館）が「邪馬溪」をめぐって日本語の講演をされたことも記憶に新しい。

また、本年の大会でも鄭珉・韓国18世紀学会会長が韓国語で挨拶された。韓国から視野をさらに東アジアへと広げるならば、広島大会のコンサートでは、青木孝夫幹事のご尽力で、18世紀東アジアの音楽が取り上げられたが、東アジアを主題とするコンサートの企画は学会史上おそらく初めてであったのではないかと思う。かつて「コンサート」のような娯楽は廃止して研究発表に変えるべきではないか、という意見もあり、この点について5年前に会員アンケートを行ったが、いわゆる「ピリオド楽器」を用いたり、あるいは楽曲解説において当時の思想的連関に触れるなどの試みをとおして、「コンサート」も日本18世紀学会ならではの行事として、〈サロン〉を構成する不可欠の要素として定着しているように思われる。日本18世紀学会のさらなる発展を祈念して、退任の挨拶に代えることにしたい。

ラモーと辛子酢

小穴 晶子（多摩美術大学）

もうだいぶ前のことになるが、ひと夏をパリで過ごしたことがある。毎日の図書館通いにも疲れてきて少し気分転換をしたいと思い、イギリスに来ていると聞いていた友人に連絡を試みた。その友人も、オックスフォードでギリシャ語文献と格闘の毎日で疲れが出てきたところだったらしい。すぐに話がまとまりオックスフォードを案内してくれるということになった。ユーロスターに乗って一路ロンドンへ。ロンドンからオックスフォードまではバスで一時間ほどである。

オックスフォードの街中や大学構内をひととおり見物し、早めの夕食は大学食堂でということになった。夏休みのため人もまばらである。そこでたまたま私の友人の知り合いの英国人学者と出会い、一緒に食事をするということになった。（食事の内容についてはあえて述べない。英国！）初老の品のいい男性で、確か古典語が専門だったと思う。私の研究内容を訊かれて、「18世紀フランスの音楽美学です」と答えた。「18世紀フランスというとどんな作曲家がいますか」と彼。「一人挙げるとすれば、ジャン・フィリップ・ラモーですね。」と私。「そうですか。でも、私はラモーよりもモーツァルトのほうが好きですね。」とその老学者は辛らつなことを言う。一瞬怯んだが、ここで負けてはならじと勇気を奮い起し「ええ、私もモーツァルトのほうが好きですが、好きな作曲家と研究の対象はまた別ですから。」と言うのがせいっぱいだった。どうせ食事中の時間ふさぎの会話で、話はその先には進まなかった。

後から考えてみても、私のこの最後の答えはなかなかよい逃げゼリフだったと思う。しかし、長い間私はこの自分の発言について思いをめぐらせていた。確かに、研究対象が一番好きなものである必要はないのだが、研究対象の価値について無関心であってよいものだろうか。何かについての研究が意味をもつためには、その何かに社会的な価値があることは前提になっているはずである。「前提」であるからその問題は研究の表面には出てこない。だからといって、その価値判断について全く人任せでよいのだろうか。いろいろ考えてみても、結局こういう難しい問題にはいまだに正解を見出せないでいる。私の暫定的な方針は、狭い意味での研究の領域から離れて、

もう一度先ほどの自分の答えの前半部分を考え直してみようということだった。本当に私は「ラモーよりもモーツァルトのほうが好き」なのだろうか。

こう答えたときはそう思っていた。しかし、そうは言うものの生まれたときからモーツァルトが好きだったわけではない。人間の場合でも「一目ぼれ」はまれな出来事で、普通はしばらくお付き合いするうちにだんだん良さが分かって好きになるものだ。私がヴァイオリンを習い始めたのは6歳のときだが、親によって習わされたというのが実情で最初はいやいやながら練習をしていた。楽しくなってきたのは中学2年のころである。そのころ、レッスンの課題として与えられたのがモーツァルトのヴァイオリンコンチェルトで、それをきっかけにモーツァルトが好きになったのである。もちろん、ここに至るまでには6年以上に及ぶ、ヴァイオリンを通じてのクラシック音楽とのお付き合いがある。

であるから、ラモーの魅力について云々するにあたってもしばらくはラモーと付き合ってみなくてはなるまい。そう思って始めたいろいろな活動の一部をご紹介したのが、去る6月の日本18世紀学会第31回全国大会でのコンサート(18世紀フランスバロックの巨匠J. Ph. ラモーをめぐって)である。コンサートの詳しい内容は、来年の「年報」でお読み頂きたいが、私が一番嬉しかったことは、「楽しかった」という感想を頂いたことである。録音技術の進歩した現在、「今、ここで」のコンサートの意義は、演奏者・聴衆が一体となって「楽しさ」を共有できることにあると思うからだ。その楽しさこそ、ラモーの曲が現代の我々に対しても意味をもち得る大事な要素である。

この演奏会ではバロックヴァイオリンを使用した。同じヴァイオリンと呼ばれる楽器も歴史の中で変化しているのだが、バロック音楽の時代(音楽史では1750年ごろまで)とそれ以後の時代で大きな構造上の変化が見られる。古いタイプの楽器を日本では「古楽器」と言っているが、20年ぐらい前からヨーロッパではいわゆる古楽器ブームが始まり、日本にもその波は押し寄せてきている。最近では、バロックヴァイオリンのリサイタルなども日本で普通に聴けるようになった。こういう流れを受けて、私が友人のヴァイオリン製作者に頼んでバロックヴァイオリンを作ってもらい弾き始めたのは4年前のことである。

私は、古楽器万能主義者ではない。古楽器を使えば当時の演奏法が分かるとか、作曲者の意図が分かるとか単純に思っているわけではない。過去の作品を演奏する目的がその時代の再現にあるとも言えないだろう。こういうことをすべて認めたくえでの話だが、演奏は単なる自己主張でもない。演奏解釈にはやはり謙虚な態度が必要だと思う。作曲者・作品・演奏者の対話のなかで、いかにして自分の思い込みや偏見から離れてより広い視野で考えられるかということは演奏にとっていわば永遠の課題である。こういう方向でものを考えると文献に頼っているだけではダメで、実験をしてみたいくなる。私にとっては、この実験がバロックヴァイオリンだった。

『江戸たべもの歳時記』(中公文庫)という本の中に、初鰹の江戸時代の食べ方についてことなくだりがある。この本の著者は、「酢とからし買う程一分の残りが残り」という川柳を引用している。この川柳の意味は、初鰹を買ったら一分からちょうど酢とからしを買うだけのお金が残ったということである。これを証拠として、江戸時代には鰹に辛子酢をつけて食べたこともあったと言うのだ(21頁)。「本当だろうか?」と実験をしてみた物好きな人がいる。物好きな人とは、実をいうと私の夫である。とはいうものの、夫は江戸文化研究者ではない。れっきとした(何を

もって「れっきとした」というのかは分からないがとにかく)生物学者である。食べること(特に和食)が好きで、『魯山人味道』など食べ物に関する本をよく読んでいる。それで、この初鰹のくだりを読んで実験したわけである。

さて、その結果はどうだったか。とても食べられない。辛子の辛さとお酢のつんとくる酸っぱさが入り混じり、脳みそのでっぺんまでしびれる感じである。そこで、この川柳についてもう一度考え直してみる。酢とからしを買いに行ったと書いてあるが、それ以外のものを使わなかったとは言い切れない。夫の仮説は、味噌を入れたというものである。辛子酢味噌なら食べられる。味噌や醤油などは一般庶民にとって常備食で、わざわざ買いに行く必要がなかったのだ。

初鰹につけたのは果たして「辛子酢味噌」か「辛子酢」か。この川柳を作った人に訊いてみることができないので正解は分からない。私は、「辛子酢味噌」ではないかと思う。私が「辛子酢」を食べてみたからそう思うのである。しかし、「辛子酢」の可能性を排除するわけではない。いずれにせよ議論の前に、実際に「辛子酢」を食べてみてください。

こういう出来事があって、はたと気がついた。私にとってバロックヴァイオリンは「辛子酢」なのだ。「辛子酢」を食べてみることによって、初めて見えてくるものがある。人間はこういう努力を重ねることによって、自分の狭い思い込みの壁を少しずつ切り崩して行くのだろう。

就任挨拶

増田真(京都大学)

このたび、小田部さんの後を引き継いで事務局を預かることになりました。研究者としても人間としても未熟ですが、文芸共和国の第一の公僕として18世紀学会の発展に努めたいと思います。本会がその伝統であり持ち味でもあるサロンのような雰囲気を保ちつつ、学問的にも充実した学会として繁栄していくことを願っています。

よろしく申し上げます。

事務局より

事務局の移転について

去る6月の大会をもって、事務局が移転しました。住所等はこの末尾に記載されています。

投稿規定が変わりました

最大の変更点は、大会の発表を経なくても論文を投稿できるようになることです。詳しくは同封のプリントをご覧ください。

2011年グラーツ大会情報

国際18世紀学会の第13回大会は2011年7月25日（月）から7月29日（土）まで、オーストリアのグラーツで開催されます。テーマは以下の2つです。

- Time in the Age of Enlightenment. Situating the Present, Imagining the Future.
- Central and Eastern Europe in the Age of Enlightenment.

大会関連のサイトが今年10月に開設されます（www.18thCenturyCongress-Graz2011.at）。登録期間や料金も先日の執行委員会で発表されましたが、変更される可能性があるため、サイトで確認してください。

なお、開催地の関係上、国際18世紀学会の2つの公用語（英語、仏語）のほか、今回はドイツ語でも発表できるようです。

日本からも多くの会員が参加されることを期待します。

国際18世紀学会の名簿について

今まで、国際18世紀学会の名簿は各国学会やヴォルテール財団を通じて更新されていましたが、今後は各会員が自分で変更を入力する方式になるようです。詳しくは国際18世紀学会のサイトをご覧ください。

なお、国際18世紀学会からの通知はメールで届くことが多くなっているため、なるべくご自分のメールアドレスを登録しておいてください。

投書欄を新設します

この「学会ニュース」に次号から、投書欄を設けることにしました。2つの欄を予定しています。

- 学会や事務局への意見、提案、希望など。
- 掲示板：研究会の呼びかけ、行事の広告、情報提供の依頼（たとえば「『〇〇』という本を探しています」など）。会員同士の連絡にご利用ください。

いずれも事務局まで。

共通論題のテーマ、および書評対象図書

会員からの提案を随時受け付けています。事務局または担当幹事まで。（ただし、共通論題のテーマ決定に際しては開催校の希望が優先されるので、必ずしもすぐにご提案が実現するとは限りませんが、事務局から開催校や幹事会に伝達します。）

学会ニュースのエッセー

今のところ、事務局から執筆をお願いしていますが、今後は会員の皆さんからの希望も受け付けたいと思います。執筆を希望される方は事務局までお知らせください。（編集の都合上、12月号は9月末までに、4月号は1月末までに、9月号は6月末までにご希望をお寄せください。）

年会費

日本18世紀学会の年会費は5,000円です。年会費について証明をご希望の方は、ホームページ「会則及び役員選出に関する細則」附則の項を印刷してご利用ください。

会費納入のお願い

学会ニュースの発送とあわせて、新年度の会費払い込み用紙を同封させていただきます。本年度までの会費未納入の方へは、滞納年数に応じた金額のものを同封しております。前回、前々回の学会ニュース他でもお知らせいたしましたが、会費の納付率が相変わらず極めて悪い状況です。事務局におきましても円滑な学会運営のため身を引き締め変わらず努力する所存ですが、会員の皆様にはどうか苦しい学会の財政事情をご理解いただき会費納入にご協力をお願い致します。

すでにご存じと思いますが、一般の銀行から郵便振替口座への入金もできるようになりました。なお、事務局の移転にともない、新しい郵便口座を開設しました。番号は以下の通りです。

00950-2-178903 名義：日本18世紀学会

旧来の口座は廃止されますので、その番号が印刷された以前の振込用紙は使えなくなります。

以上

名簿についてのお詫びと修正

本年4月にお送りいたしました2009年度名簿において、事務局の手違いにより中山智子会員の会員種別を誤って賛助会員として記載いたしました。正しくは正会員です。ここに中山会員にお詫び申し上げますとともに、訂正いたします。

新入会員の方へ

毎年6月の幹事会で入会を承認された方はその年度からの会員となります。6月の幹事会以降に入会を申し込まれた方は12月の幹事会で承認され次年度からの会員扱いになりますので、会費の請求はありませんが、他の会員同様に諸種の配布物をお届けいたします。

新会員の勧誘のお願い

ぜひ18世紀研究に関心のある方を本会にご勧誘ください。入会申込用紙は日本18世紀学会ホームページからダウンロードできますので、よろしく願いいたします。

メーリングリスト

日本18世紀学会では学会や研究会のお知らせ、ヴォルテール財団からの連絡などをメールによって会員の方々にお知らせしております。ご希望の方は事務局までご連絡をお願いいたします。なお、現在事務局からメールをお送りしてもお届けできない会員の方がいらっしゃいます。ご希望にもかかわらず、メールをお受け取りになっていない方はお手数ですが、事務局までご連絡をお願いいたします。

幹事会メンバー(50音順): 安西信一、井田尚、伊東貴之(東アジア交流担当)、王寺賢太(国際幹事)、小田部胤久、笠原賢介、川島慶子、小穴晶子、関谷一彦(常任幹事、年報担当)、田邊玲子(常任幹事、年報担当)、寺田元一(国際学会執行委員)、長尾伸一(東アジア交流担当)、中山智子(常任幹事、総務・会計)、服部典之(常任幹事、年報担当)、堀田誠三、増田真(代表幹事)、吉田耕太郎(常任幹事、年報担当)

会計監査: 中島ひかる 濱下昌宏

日本18世紀学会ニュース 第61号 2009年9月発行

発行者 日本18世紀学会 代表者 増田 真

事務局 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 増田(仏文)研究室

e-mail: jsecs@bun.kyoto-u.ac.jp

tel. / fax: 075-753-2766

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsecs/>